

史遊会通信

NO. 201
平成23年
9月1日
発行

事務局
☎
03--3712
0651
下山田方

七月講演要旨

司馬遼太郎の世界

—「坂の上の雲」を中心として—

山田嘉久

一、流行作家としての司馬遼太郎
昭和三十五年（一九六〇）、「梟の城」

で直木賞を取った司馬遼太郎は当初、剣豪作家、伝奇作家として作家の仲間入りをした。このことは彼にとつては必ずしも本意でなかったかもしれないが、瞬く間に、同時に十本近くの連載を抱えた超売れっ子の流行作家になった。東京オリッピック前後の高度成長期の世相と彼の明るい作風が見事に一致した結果によるものであり、当時の週刊誌ブームもこれに拍車をかけた。後の司馬遼太郎は「女性を書かない作家」いや「書けない作家」の定評が確立したが、この時代の作品には適当な濡れ場もあり、

希代なエンターテイメントの作り手であることがよく分かる。

しかし昭和四十年代に入ると彼の作風も少しづつ変わってくる。昭和四十一年に「殉死」、続いて翌年に「故郷忘じがたく候」などの話題作を次々と発表してくると、世の中の彼を見る目も、単なる流行作家でないことに気付き始める。司馬自身も本格的な歴史小説家に変身するのである。その集大成が代表作「坂の上の雲」であろうが、その「あとがき」にも、史実でないものは一〇〇％書かなかったと言っている。

そして昭和四十年代の十年間、この作品に懸けたとも書いている。最初の五年間は

例会のお知らせ

◎ 9月例会

日時 平成23年9月16日（金）

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第3研修室

講演 太田精一氏

テーマ 「幕臣たちの明治維新」

自由執筆 小田絨一郎・中込勝則

村上邦治の諸氏

締切 9月末日（厳守）

◎ 10月例会

日時 平成23年10月21日（金）

午後2時～4時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 山本鎮雄氏

テーマ 未定

自由執筆 新井 宏・柴田弘武

瀧澤 中の諸氏

締切 10月28日（厳守）

その資料作りに、後半の五年間はその執筆にである。あの三十年代、一度に十本近く連載ものを抱えた時代とは全く違う司馬遼太郎がそこにあった。驚くことに、この十年間、彼はなるべく人に会わないことに心掛けたという。人に会って喋ることが好きで、周囲の人から「人たらしの司馬遼太郎」と評された彼にとつては非常な決意であったであろう。さらに驚いたことには、執筆に疲れた時には「空海」のことを考えたという。このあたりが凡人と違うところで、その結果が昭和五十年代に入つてすぐに作品となった「空海の風景」で、これも彼の代表作となった。

二、司馬文体の特徴

1 題名の付け方は天才的

これは彼がジャーナリスト出身であることに負うところが大きい。「竜馬がゆく」「燃えよ剣」「国盗り物語」「花神」など枚挙にいとまがないが、その代表格が「坂の上の雲」という題名であろう。しかしあまり有名になったがために、作品内容とは別に、独り歩きしてしまっている。

2 冒頭の文章にインパクトの強い語句を使用する

これによって冒頭から読者の心をぐっと掴んでしまおうというジャーナリスト根性によるものだろう。「まことに小さな国が、開花期を迎えようとしている」(坂の上の雲)が代表例だが、「竜馬がゆく」や短編「英雄児」のように最後の文章に印象深い名文を持つてくることもある。

3 司馬文体は原則として話し言葉

そのため時には主語と述語が逆転することがある。(「国盗り物語」の出だしなど)このことは彼が同人誌「近代説話」からスタートしたことと関係がある。方言を効果的に使うのもこのためだろう。

4 最大の特徴は「寄り道」(digression)の文章

「余談ながら」「以下、無用のことながら」と断りながら意識的に「時空を超えて」脱線する。しかし、この「寄り道」はドラマ化、翻訳化には障害となる場合が多い。

5 その他、耳に快い簡潔な漢文調、口語化された漢文、比喩が多いなども特徴

これらが司馬文体は「人たらしの文体」と云われる所以なのだろう。

三、司馬遼太郎は正岡子規が好きだった「坂の上の雲」は秋山好古、真之と正岡子

規の三人を中心とした明治青春物語だが、土台となったのは司馬の子規好きだった。

司馬は「明るい明治」対「暗い昭和」、「リアリズムの明治」対「イデオロギーの昭和」を対比させたが、子規の楽天的性格や彼の唱えた写生主義が格好の材料となった。「坂の上の雲」を書き終えた司馬は、「子規全集」の編集にも参加している。

そして正岡忠三郎(正岡家の養子)とその友人ぬやまひろし(詩人)と司馬自身の交流を描いた小説が「ひとびとの足音」(読売文学賞)である。

四、「坂の上の雲」後半は一転して日露戦争の話となる

子規は日露戦争前に死去してしまつたので、前半の「小説らしい小説」から一転して主題は日露戦争となり、戦争に直接間接に参加した多士済々の多くの人物——山縣有朋、大山巖、伊藤博文、山本権兵衛、東郷平八郎、乃木希介、兎元太郎、広瀬武夫、小村寿太郎、明石元二郎、金子堅太郎、桂太郎、高橋是清などを見事に描き出してゆく。「人物月旦」を得意とした司馬の真骨頂といえる。

彼の人物月旦の中で、特筆すべきは「乃

木愚将論」である。

これより二年前の昭和四十一年に乃木を主人公とした中編「殉死」を書いたが、此処で展開された乃木愚将論はそのまま「坂の上の雲」でも引き継がれている。従来の乃木英雄論から、詩人としては優れているものの軍人としては能力の低い単なる精神主義者に過ぎないという司馬の筆法は鋭い。

日露戦の勝利を決定した日本海海戦についても戦況の細部に至るまで、臨場感溢れ描く。特に東郷と真之（秋山）の共同産物といえる「丁字戦法」の迫真の描写は、読む者をして唸らせる。（もともと、当戦法は現在の研究では否定されているが）

七ヶ月間をかけて地球を半周するバルチック艦隊の動向を刻々に描写するほか、兩軍の司令長官（東郷とロジェントウエンスキー）の人物比較にまで及ぶ。その一方でバルチック艦隊を最初に発見したという宮古島沖の漁師の話、それを無線装置のある八重垣島まで必死に知らせる五人の若者の話など「秘話」も忘れない。読者へのサービスピ精神旺盛というべきか。

最終章「雨の坂」は私の最も好きな章である。章名が示す通り、今までの明るい文

章から一転して、これからの日本の将来を暗示するような暗い文章となる。

そして「奉天へ」と呻くように叫んだという好古の最期の言葉を以て、この長い物語を終わっている。

五、「坂の上の雲」批判と司馬史観

司馬の代表作となった「坂の上の雲」については「不滅の国民文学」としての評価が高い。その中であって島田謹二（比較文学）の評は特異なものであった。一般には日露戦争戦勝物語と考えがちのこの本を、「現代の平家物語」と解しているからである。日露戦の勝利の瞬間から日本の滅亡が始まったと島田は評した。このことは司馬にとっては「よくぞ、そのような読み方をしてくれた」との思いが強かったであろう。終生、司馬は島田を尊敬した。

一方、この本に対する否定的批判―つまりは「司馬史観」に対する批判も多い。

一つは司馬の戦闘場面の描写の間違った指摘。代表的なものでは、有名な丁字戦法は存在しなかったことなどが挙げられるが、これらは司馬が執筆当時には詳細は分からず、その後、新事実が続々と発見された結果である。しかし「坂の上の雲」は歴史書

ではなく、あくまで歴史小説なのである。戦闘場面のディテールについての指摘は批判に当たらない。

それよりは司馬の戦争観についての批判の方が重要である。日露戦の舞台となった韓国、中国の民衆の姿を司馬は描いていないとの批判は、この本の唯一の欠点として妥当であろう。

更に天皇（この場合は明治天皇）について全く触れていないとの指摘もあるが、司馬が日露戦争は昭和の戦争と違って「天皇のための戦争」ではなく、この頃漸く成立した「国民国家のための防衛戦争」と捉えている以上、天皇を書く必要はなかった。

六、司馬遼太郎は「昭和史」を書かなかった

しかし昭和の戦争となると昭和天皇抜きには語れない。司馬が「昭和史」を書かなかった（否、書けなかった）最大の理由はこの辺にあるのであろう。このことは多くの識者が指摘している通りである。

それにしても日本にとって日露戦争は防衛戦争、太平洋戦争は侵略戦争との司馬史観に対しての論争がもう少し盛んになってもよいとの思いが私にはある。

自由執筆

黒船物語 (一)

— 世界情勢と幕末 —

— アメリカ合衆国編 —

(友の会) 由利 潤一

嘉永六年六月三日(一八五三年七月八日)四隻のアメリカの軍艦が浦賀に現れ、太平の夢を破ることになった。これらの船は当時の最新艦ではあったけれど、初期の蒸気機関を備えた外輪船であり、一気に大洋を横断できるほどの能力は持たず、アメリカ東海岸から出発し各地に寄港しながら日本に來航した。しかし蒸気船を始めて見た浦賀奉行は「進退自由にて、櫓、櫂を用いず、迅速に出没し……泰然自若とまかりあり、実に容易ならざる軍艦」と報告している。來航に直面した幕府役人や一般庶民にとっては晴天の霹靂であったであろう。

しかしその來航は長崎の出島を通じてオランダから幕府首脳部に通知されていた。外庄が現実のものにならないと行動しないのが日本の対応であり、徳川幕府も同様で、噂だけで実際には來ないだろうと思ひ、何

の対策も取っていなかったのである。

今まで日本は四面海に囲まれていて安全だと信じていた。実は四面環海ということ、相手が望めば日本のいずれの場所にも容易に近づくことが出来る事が明らかになったのである。たぐさんの兵員と二百門もの大砲を積んだ艦隊が江戸の近くに現れ、交渉を迫ることになった。これに對抗しようにも二百数十年間武器、兵器の進歩、改良、大船の建造を許さずにきた幕府の政策から、外国の艦隊に対抗できる十分な武器も無かった。江戸を護る旗本八萬騎も打ち続く平和に都市遊民と成り果てており、役に立ちそうもなかった。かくてアメリカの圧力に屈した幕府は久里浜においてアメリカ側が持参した国書を受け取り、翌年の再航にも同意した。

翌嘉永七年九隻からなるさらに大規模なペリーの艦隊が戻り、その武力を背景に日米和親条約を結結するよう迫った。今にも江戸近くまで侵入する様子を示され、アメリカの高圧的な外交に屈し神奈川において条約に調印した。アメリカだけでなく、この後続いてロシア、イギリス、フランス、オランダとも条約を結ぶことになる。

我々は今でも、このペリーの艦隊が何処

からどうしてやって来たかということを深く考えない。現在なら太平洋岸にはアメリカの軍事拠点が多くあり日本へ来るのも容易なので、多分アメリカ西海岸の何処からかやってきたと考えがちである。しかし東部十三州が一七七六年イギリスから独立してから一八〇三年までは、太平洋に面した領土は持たず、大西洋を挟んでヨーロッパを向いた国であった。その領土は北は五大湖地方、西はミシシピイ河の東岸までに限られ、隣接して仏領ルイジアナがあった。一八〇三年にニューオーリンズの購入とミシシピイ川の通行権についてフランスとの交渉を始めたところ、欧州でも多額の戦費を必要としていたナポレオンはニューオーリンズからカナダ国境にいたるルイジアナ全体の売却を提案してきた。アメリカはこれに応じ広大なルイジアナを一五〇〇万ドルで手に入れた。原住民が多く住み、まだ地理学的にも未知な所も多かったこの土地を探検することから始め、太平洋岸に至る西部への膨張が始まった。この後イギリスはアメリカ合衆国の西部への進出を好まなかったので一八一二年には英米戦争も

起きていた。

十九世紀の始めに太平洋岸からまだ程遠いところから、今も西部劇で取り上げられるアメリカ合衆国の西部進出が始まる。テキサス共和国の樹立とそのアメリカ合衆国への併合に端を発したアメリカ・メキシコ戦争（一八四六〜一八四八年）が起り、戦いに勝ったアメリカはニューメキシコ、カリフォルニアなどを併合する。カリフォルニアで一八四七年に金が発見されるや、ゴールドラッシュが起き、海路あるいは陸路で殺到した人たちが州の人口が急増し、カリフォルニアは裕福な州として発展する。

このように太平洋岸まで領土を広げたアメリカは、急にアジアの隣人になったことを自覚し、将来有望な中国市場にアクセスするために太平洋横断航路の開発の必要性を感じた。その重要な中継地点として、また当時盛んであった捕鯨船のための避難港や薪水の供給場所として日本を開国させるために日本に使節を送ることになる。

アメリカ・メキシコ戦争中は米陸軍の司令官であったテラーは、名声が高くホイッグ党から大統領に立候補して十二代大統領に当選する。しかし就任後一年四ヶ月で

急死したので、副大統領フィルモアが十三代大統領に就任する。

選挙で選出されていない大統領として、彼は議会の協議が必要な外交官を派遣するのではなく、行政権による国事行為として海軍に日本開国の交渉をさせることにしたのである。その任にあてるため米墨戦争の頃、アメリカ海軍のメキシコ艦隊の司令官であつて「汽走軍艦の父」と呼ばれるほど蒸気船の採用に熱心であつたペリーを選んだ。彼を東インド艦隊司令官に任命し、メ

キシコ艦隊では不要になる汽走軍艦とともに日本に向かわせることになる。蒸気で走る黒船の出現は文化的ショックを日本に与え交渉にも有利に作用したのであろう。ペリーを送り出した当時のホイッグ党政府はかなり膨張主義的であつて、ペリーは日本に來航する前に琉球を調査し、その占領さえも政府に上申していた。しかし次の選挙で民主党の大統領ピアースが選出されると、国の方針が変わつてそのような武力行使は認めなかつた。（続く）

自由執筆

李氏朝鮮王朝と

足利幕府の類似性

隆 恵

近年、韓国の時代ものドラマに嵌まり、今年は十五世紀半ばの李氏朝鮮王朝の王位をめぐる壮絶なる物語の「王と妃」を楽しんでいる。以前、新井宏さんから、「李氏朝鮮の歴代王で、宮殿で自然死を迎えた王は少なく、その多くが毒殺された」と拝聴

していたが、ドラマとは言え史実を踏まえているので、興味津々であつた。李氏朝鮮王朝は、モンゴル帝国の元の属国化来の末期的症状の高麗王朝を打倒して、西暦一三九二年に太祖李成桂が建国、爾来一九一〇年の日韓統合までの約五〇〇年間存続する。この建国の年は、くしくも我が国の室町時代の第三代將軍義満による南北朝合一の年であつた。このドラマは、韓国で歴史上最高の英明君主として人氣の高い第四代の世宗大王の崩御後の政治的混乱をテーマとしている。

世宗大王は、建国来の王位を巡る王族同士の殺戮を改めるべく、嫡子相続の法を定めて病弱の嫡子を後継の王とする。しかしこの文宗は僅か数年で病死、その後継として嫡子相続の世宗の定めに従い、幼い端宗が即位する。ところがこの幼君の誕生を機に重臣達による専横が始まり、これに危機感を抱いた世宗の次男である首陽大君（世祖）が甥の端宗から王位を篡奪し、その挙句に暗殺してしまう。更に王位のライバルの弟達も謀殺するなど、太平の世をと願った世宗の思いはあっけなく潰え去る。王座を横取りした世祖は王権の強化に努めるが、在位中に嫡子の世子（皇太子）が病死、若き次男に生前譲位するもこれまた直ぐに病死、その後継の王位を巡って王族と重臣達の相克の後、若か死した世子の遺児の成宗が若年で即位する。

世宗大王は、北方の女真族や倭寇の撃退、日本の対馬占領、ハングル語の制定等と業績の多い偉大な君主とされている。しかしルイ十四世や平清盛や織田信長のような絶対的君主では決してなく、その実態は重臣達の中での相対的優位の存在に過ぎなかつたため、崩御するや息子や孫たちが重臣達

に翻弄されるのである。

この李氏朝鮮王朝の脆弱さの原因は、絶対的な王権を振るに足る直轄領地が少なく、もう一方の財源である商業の流通税も重臣達に横領されるなど、財政基盤が極めて弱体であり、従って直属の兵力も少なく、王は重臣達の傀儡となり、血筋の正しさだけが取り柄であった。王家を凌ぐ財力と武力を握る重臣達が新王朝の樹立に動かなかった理由は、隣国中国の明や清の冊封を受ける半独立国であったため、王朝転覆は中国の介入の危惧があつたためであろう。従って、重臣達は、操り人形になり得る王の擁立を画策する。五百年間のこの王朝の歴史は、王権を奪回しようとする王と傀儡の王の擁立を狙う重臣達との陰湿な確執が絶え間なく繰り返される。

五百年間も李氏朝鮮王朝が存続した背景には、儒教を国是としていた事と科挙制度による儒学者（文官）を両班に登用したのち、我が国の室町時代の「腕力の強い者勝ち」と言う下克上は起きなかつた。表舞台での王の殺戮や放逐こそ稀であつたが、重臣達の後援を得た王族同士による王位継承者達の粛清と抹殺は頻発に起こる。

この李氏朝鮮王朝の実態は、わが国の平安時代の藤原氏による摂関政治や、室町時代の足利幕府と酷似している。

足利幕府は、源氏嫡流の幕府と言うこともあって、北条氏の鎌倉幕府よりも華やかさがあるも、第六代義教と第十四代義輝は配下の大名に殺戮され、第十代義材（第十二代義植と同一人物）以降の三人の將軍は流浪の末客死している。

足利幕府は、初代尊氏が開幕した西暦一三三九年から義昭が信長に放逐される一五七三年までの二百三十四年間である。この年数だけは徳川幕府と変わらぬ長期政権なのだ。南北朝対立による内戦状態が一三九二年まで続き、一四六七年勃発の応仁の乱以降は下克上が横溢する時代であり、極論になるが第三代の義満が南北朝の合一を成し遂げて死去するまでの約十六年間だけが將軍の權威が保たれたに過ぎない。

要するに、足利幕府は有力守護大名の擁立した名目だけの將軍が多かつたわけ、唯第三代の義満だけは真の絶対的な將軍であつた。しかし、この義満の後継の息子第四代義持と孫の第五代義量が若か死するや、その後継將軍の擁立に有力大名達の思惑が

交錯し、結局義満の息子の義教が僧侶から環俗し、石清水八幡の当りくじを引いて將軍に推挙される。俗に「くじ引き將軍」と擲擲される將軍である。ところが、義教は即位するや父義満のような権力を取り戻すべく有力大名の抑圧に奔走したため、大名（赤松満祐）に暗殺される。

こうした足利將軍家の弱体ぶりの原因は、足利氏が後の徳川氏のような圧倒的な大名ではなかった事に尽きる。武家政治の鎌倉幕府亡き後、多くの武士達は公家政治の

自由執筆

「チャンコロが来たど」

平山 善之

大正の中頃、片田舎の農家。昼下りの庭先で数人の婆さん達が茶飲み話をしていた。鶏が何かついでに、男の子が地面に絵を描いて遊んでいる。そこへ一人の若い中国人の行商人が商いにやってきた。

（当時の農家は衣食住の殆ど、味噌・醤油に至るまで自給自足しており、魚肉類や小間物などは行商人から買うことが多かった。

復活を嫌い、傀儡將軍に相応しい源氏嫡流の名家であった足利氏を將軍に戴き、武家政治の継続を目指した。要するに、足利氏は実力で並み居る守護大名を屈服させて幕府を開いたのではなかったため、有力大名の傀儡化は必然の結果であった。

このように、李氏朝鮮王朝と足利幕府の実態はよく似ている訳だが、世宗大王と足利義満の境遇もよく似ているので、次回にご紹介したい。

そして、行商人は、中国人が結構いたそうである。華僑は当時、大商人ばかりとは限らなかった。

一人の婆さんが周囲に、「オラ、チャンコロが来たど」と言った。支那人の行商人が来た、と皆に声をかけたのである。

途端にその行商人が血相変えて「ナニ。も一辺言ってみろ、チャンコロとは何だ。オレタチも人間だ」と言った。

その劍幕の凄まじさに、男の子は飛び上がった母親の後ろにかくれた。

右の話は、亡父が何度か私に語った話で、そこに居た男の子が私の父親である。

大きな農家は商業や商人を軽んじる風もあったが大正のころ既に中国、また中国人に対する蔑視の風潮が日本中に蔓延していたこと、そして、それに対する中国人の反感がわかる。必然的に激しい反日運動へと進展したものであろう。欧米における日本人蔑視の裏返しである。

何故、他のアジア人に対する蔑視が起きたのか。日本の片田舎にまで拡がったか。

幕末に阿片戦争の結果を聞いた日本人は、それまで師と仰いでいた国がイギリスに敗北したことに驚愕した。

維新後、列強の侵略を防ぎ植民地化されることを免れるには「脱亜入欧」しかない。攘夷を叫んできた志士達は豹変する。

植民地にされるより、する方になれ。明治十八年三月十六日の時事新報は「脱亜入欧論」を掲げた。著者は定かではないが時事新報は福澤諭吉の創刊であり、彼の主張であったことは間違いない。

私は、昭和二十年の敗戦の主因は国民の間に蔓延していた驕慢・思い上がりにある、と考えている。「脱亜入欧論」がこうした思い上がりを形成する上で果たした役割は決して小さくはない。

勝海舟は別の考えを持っていた。

彼は、アジア諸国が結束して西洋列強の侵略、植民地化に対抗すべきであると考え、中国に対しても、然るべき敬意を失わなかった。「海舟座談」などを讀むとそれがよく解る。日清戦争にも彼は反対であったという。論吉の論に比べ卓見というべきであろう。しかし、彼の説は採られなかった。そして、北清事変、日清戦争で常に敗走した中国人の姿は更に中国人蔑視の風潮をもたらした。農村における、華僑の姿もこれを助長したかも知れない。

そして戦争が無ければ尊敬されない職業軍人は自らの保身・栄耀のために、この風

祝 出 版

新井宏共著

『古代の鏡と東アジア』

単弥呼の鏡は海を越えたか—

学生社

定価二四〇〇円十税

潮に乗って対外戦争へと突き進んだ。昭和に入ってはもはや誰も第二次大戦への日本の参加を止められなかった、と思う。罪は一部の人間というより、国民全体にある。

山本七平に「空気の研究」という論稿がある（昭和五十七年四月）。日本人は戦前のみならず、戦後も世を覆う「空気」というものに抵抗できない、ということを経々な事例をあげて検証している。まさにこの「空気」が日本を滅ぼした。自由に自主的に物事を判断できない国民性が亡国の犯人だった。だからといって当時の指導者が免責されるわけでは決してない。指導者たるもの、国民の驕慢を抑える為に命を投げ出す義務があった。時代の空気を变えるだけの見識と勇氣、死んでもこの空気を变えるのが我が務めと邁進することこそ、求められる。迎合はゆるされない。しかし、不幸にしてそうした指導者を昭和前半の日本は持ち合わせなかった。勝海舟もなく、日露戦争当時の児玉大将のような軍人も居なかった。政・官・軍いずれの分野も、所謂学校秀才の、三流の小物ばかりだった。

昨今の空気は「増税反対」「脱原発」らしい。そして政治家はこの「空気」にふれ

ることを極度に恐れている。大衆迎合主義、ポピュリズムは戦前よりひどい。

福祉と財政、震災復興、いずれの為にも増税は必至であるにも拘わらず、次回選挙で自分が落ちる、自党が敗北する、と言つて増税を言い出せない。エネルギー問題・二酸化炭素問題を考えれば原発は不可欠であるにも拘わらず空気が脱原発だからと国民を説得しようとはしない。

それぞれの前提となる、「無駄遣い停止」「腐敗・汚職撲滅」「安全性の確保」「災害補償」などをきちんと約束し具体策を示せば国民は納得するはずである。

我々はいつ、「殺されても信念を貫く」という指導者を持てるのだろうか。

事務局だより

電力事情により例会日を第三金曜日に変更しましたが、決まった時間帯の予約が難しく、9月は夜間、10月は午後、11月は夜間という状態です。冬場になって事情がどのように変わるかわかりませんが、お知らせは必ずご覧になってください。先日の幹事会で、事情が安定すれば、元の水曜日の夜間に戻そうかという案ができました。